

〔10番 住田清美 登壇〕

○10番（住田清美）

それでは議長のお許しをいただきましたので、本日のラストバッターでございますが、早速質問に入らせていただきます。

私は今回、少子化における学校運営、そしてシニアのことは子供とお年寄りの大事な根幹について質問をさせていただきます。

初めに、少子化における学校運営についてお尋ねいたします。厚生労働省が6月3日に公表した人口動態統計（概数）によりますと、2025年に国内で生まれた日本人の子供の数は67万1,236人で過去最小となりました。また、女性1人が生涯に産む子供の推定人数（合計特殊出生率）ですが、1.14%で、こちらも最低を更新しました。出生数、出生率とも10年連続のマイナスです。飛騨市でも、今年は市内小中学校合わせて1,367人ですが、4年後には1,100人台になり、その後も減少していくのではないのでしょうか。少子化の影響は学校運営にどのような影響を及ぼしていくのでしょうか。集団での教育が難しくなるのでしょうか。団体競技なども選択肢が限られてくるのでしょうか。学校設備の充実は図られていくのでしょうか。先生の数はどうなっていくのでしょうか。様々な課題が頭をよぎりますが、今回は少子化における学校運営について次の3点お尋ねしたいと思います。

1点目は、少子化によって危惧されること。子供の数にかかわらず、日本全体が人口減少に陥っていく昨今、人口は減るものとして様々な施策を考えていく必要があります。小学校のクラス数を見てみても、古川西小学校、神岡小学校は2クラスから1クラスになっています。山之村小学校は1年生から4年生まで児童がいません。逆に言うと、それだけ一人一人に十分目が届きやすくなっていくのかもしれませんが、学校という集団での教育に支障は出てこないのでしょうか。飛騨市の子供たちが地域に愛着を持ち、未来を担っていくために、今後少子化が進む中で心配されること、学校運営に支障が出ないかお伺いいたします。

2点目は、飛騨市学園構想における大学との連携についてです。飛騨市学園構想は、予測困難な時代を生きる子供たちに、社会総がかりで未来の創り手となる力を育む地域教育魅力化プロジェクトです。近年は、古川中学校のマイプロジェクトをはじめ、各学校でも探究学習の様子が報じられています。その中の目指す未来の作り手像の表がありますが、縦ラインには、保育園から大学までが記載されています。今までは、市内で大学と連携することはほぼなかったと思われますが、この春よりC o I Uが開学し、大学も学園構想の中に具体的に关われるようになりました。市内で大学生の姿を見ると、何だかワクワクします。果てしない将来性にドキドキします。そこで、飛騨市学園構想の中で、大学に期待すること、またどうやって大学と連携していくのかお聞きしたいと思います。

3点目は、少子化における不登校支援についてです。少子化で子供の数は減っていきませんが、県内の不登校児童生徒は増加傾向が続いています。私は12月の議会で、不登校児の対応について質問しました。その中で、市では各学校に校内教育支援センターを、校外教育支援センターとしてはグリーンルームを設置し、支援体制を整えている。また、一人一人の状況に応じて、教育相談員、スタディーサポーター、作業療法士、スクールカウンセラーといった専門家を交えたケー

ス会議を開催し、迅速かつ柔軟な支援体制を取っているとの答弁でした。不登校、あるいは登校渋りの児童生徒に対し手厚い体制が整っていますが、親と子が本音で語れる場所があるといいと思っています。学校でも、行政でもない、ワンクッション置いた距離での語らいの場、学びの場が必要ではないでしょうか。例えばその中で、ハルジオンという組織があります。ハルジオンは家庭支援に重きを置いていますが、親御さんの声を拾い、行政との橋渡しを担うような形にできないでしょうか。場所の確保や人材の充足などで不登校に関わる親子のとりでとなるようにできないものではないでしょうか。児童生徒にとっても、家庭にとっても選択肢は多くあったほうが救われると思います。いかがでしょうか。

◎議長（澤史朗）

答弁を求めます。

〔教育長 下出尚弘 登壇〕

□教育長（下出尚弘）

では、少子化における学校運営について。初めに、御質問の1点目と3点目についてお答えします。

まず1点目、少子化によって危惧されることについてです。少子化の進行に伴い、児童生徒数や学級数の減少が続いております。児童生徒数の減少により、集団活動や多様な人間関係の中で学ぶ機会が以前と比べて少なくなることが危惧されます。こうした課題に対し、飛騨市は他校との交流活動について年間を通して計画するとともに、オンラインを活用しての合同学習にも取り組んでおります。また、地域の皆様にも、御理解と御協力をいただきながら、多様な立場の人々と関わり、その考えに触れながら学ぶ授業も実施しております。このような取組を進めながら、一人一人に寄り添い、それぞれの好きを育み、得意を伸ばす、少人数ならではの特色ある教育の推進を図ってまいります。今後も、少子化による影響を十分に見据えながら、子供たちにとってよりよい教育環境の確保と、安定した学校運営に努めてまいります。

次に、3点目の不登校支援についてお答えします。議員御指摘のとおり、不登校児童生徒にとって、支援の選択肢が多様であることは大変重要であると認識しております。親と子が相談できる場所として、市で設置している校外教育支援センター「グリーンルーム」においては、複数の利用実績があり、保護者支援の面でも一定の役割を果たしております。また、例に挙げられたハルジオンにつきましても、保護者や子供にとって、学校や行政とは異なる居場所の一つとして重要な役割を担っていただいているものと認識しております。加えて、必要に応じて行政窓口や関係機関につなぐなど、保護者と行政との橋渡しにも御協力いただいております。一方で、場所や人材の確保などの課題があることは承知しておりますが、運営の在り方につきましては、当該団体の自主性や独自性も尊重する必要があると考えております。今後も関係機関との連携を図りながら、既存の支援資源を生かし、児童生徒一人一人の状況に応じた適切な支援に努めてまいります。

最後に、2点目の御質問、飛騨市学園構想における大学との連携についてお答えします。本年4月に、飛騨市内に大学が開校したことは、本市の教育や地域づくりにとって大変意義のあることと考えております。飛騨市学園構想が目指す、これからの社会を生きる児童生徒につけたい力である、自らの問いや願いを持つ力、仲間と協働する力、よりよく課題を解決する力は、C o I

Uが目指す問いを立てる力、共創する力とも通じるものがあり、大学生との交流や協働を通して、子供たちの学びがより深まることを期待しております。既に、学びに対して大変主体的な学生からよい刺激を受けております。例えば、防災士の資格を持つ大学生と中学生が、防災をテーマにともに学び合う活動を実施しており、今後はそれぞれの探究学習の成果を発表し合う機会も予定しております。このような取組は、異年齢の交流、互いに学び合う貴重な機会になるものと期待しております。

また、放課後児童クラブへの関わりについて、教育委員会へ相談に訪れる学生や地域の登下校見守り活動への参加意欲を示す学生もあり、地域の子供たちや地域住民との交流や支援活動への関心の高さも感じております。大学生という若い情熱と行動力を持った人材が教育現場や地域活動に加わることは、子供たちにとっていい刺激となるだけでなく、教職員にとっても、新たな気づきや学びにつながり、学校や地域全体の活性化にもつながるものと考えております。今後も、大学が有する専門性や学生の活力を生かした連携の在り方について大学側と協議を重ねながら、連携体制の構築に進めてまいります。

〔教育長 下出尚弘 着席〕

○10番（住田清美）

御答弁をいただきました。そうですね、少子化はすぐに止められるものではなくて、今後少なくなっていく中でも今おっしゃっていただいたように一人一人に目を配った手厚い支援が行われることを期待しておりますが、やはり最初の少子化によって危惧されることの答弁の中で、他校との交流ですとか、地域との協力ということもありました。先日、新聞にも載っていましたが、今、宮川小学校が保小連携ということで保育園と小学校が一緒のところがありますが宮川小学校も児童数が少ないものですから、ときにはやっぱり同じ小学校だけではなくて、保育園の子から見たら、お兄ちゃんお姉ちゃんと交流することが、今後のこの子たちの将来の関わりになっていくということが掲載されていました。そのほかにも、河合とか宮川、山之村なんかでは、運動会を地域の人も子供たちも一緒になって、地域と関わりやりながらやっているとあります。そんな保小連携、いろいろな地域との連携が今後ますます進んでいけば、子供たちの様子、地域の皆さんの元気の活力にもなるのではないかと考えております。

ただ、この少子化によって、先ほども御紹介しましたがクラス数が減っていくものですから、多分空き部屋が今後増えていくのではないかと考えておりますが、このような空き部屋の活用方法とかについて、特に今のところ計画はございませんでしょうか。

◎議長（澤史朗）

答弁を求めます。

□教育長（下出尚弘）

空き部屋についてですけども、学級数が1減、2減となる部分もありますけども、空いた部屋につきましてはいろいろと学校内での多様な活用、あるいは特別支援学級の有効な活用というようなことが今されているところでございます。今後、地域との協働という意味では地域の方との交流のスペースというようなことをいろいろと今検討している学校もございます。

○10番（住田清美）

空き部屋なんて言いましたけど、空き教室ですね。空き教室は多分エアコンが設置されてい

るので、いろいろな使い方が模索されると思いますので、子供たちのクールダウンの部屋に使っていただくのもいいです、地域の皆さんとの交流の場、保育園の子どもたち、また、未就学児の子どもたち、未就園児の子どもたちが来る場所として使っていただいてもいいと思いますが、ぜひ有効活用をしていただければと思っています。

それから2点目、大学との連携につきましては、今の飛騨市学園構想の思いの中で同じく共有するところがあるので、今後も交流、また、協働していきたいというお話をいただきまして、今現在でも交流をされているということです。大学生の皆さんというのは、本当に保育園や小学校、中学校、高校の子どもたちにとっても、大先輩になりますので、そんなお兄さんお姉さんたちの力、それから彼らの持つ知識というのが、これから飛騨市の大きな原動力というか、大きな宝になってくるかと思っていますので、ぜひまた大学との交流も進めていただきながらお願いしたいと思えますし、C o I Uは共創学部ですから、同じく今の探求とかマイプロに通じるところがあると思えますので、今後もいろいろな学校へ行ってもらいたいと思いますが、その辺バランスよく大学との交流ということも今後考えていますでしょうか。

◎議長（澤史朗）

答弁を求めます。

□教育長（下出尚弘）

今議員がおっしゃったとおり、バランスよくいろいろな学校に学生が関われる、一緒に取り組める、そういった形を目指していきたいと考えております。

○10番（住田清美）

お願いいたします。それから少子化の中でも、不登校の児童が増えていくということを質問させていただきまして、再度の再度の質問になって申し訳ないと思うんですが、やはりそういう当該者のお母さんの声も聞きますし、今、新入社員とか新入学生にとって学校や会社に行きたくないというのが五月病とかって言われることがよくあったんですが、最近は六月病というものもあるらしくて、環境に慣れないのが五月病で、六月病という新生活や新しい環境に慣れ始めたこの6月頃に、長期間の緊張の糸が切れたり、理想と現実のギャップに直面したりして、心の不調が起きる六月病というのがあるそうです。特に新入生にとってはこの時期なのかもしれないですし、登校渋りの子どもたちがだんだんに行けなくなる、この時期ではないかと思っています。そういうときにもしっかりと目を配っていただきたいと思います。

やはり不登校になるには、その子その子によっても、その家庭環境によっても違うかと思うんですが、様々な理由があったりしています。そしてまた、不登校には段階があります。最初に行き渋り期があって、混乱期があって、慢性期があって、回復期があってというような一連の流れがあります。それぞれ表情とか様子、関わり方、そしてまた、「これだけはやめて」など記された本もあります。

そのような中で、不登校で悩んでる子どもたちもいます。私が学校でもない、行政でもないところに一つ何かしてほしいと言ったのは、特にこういう知識を持った方々がサポートしてくださること、そして学校はやっぱりその子が今日出てこない、家庭に連絡してどうして欠席なのですかという出欠の確認をされると思うんですが、該当のお母さんにとっては、朝布団から出てこない子に「今日学校に行くの。」って、その一言がなかなか声かけられないというお話も聞きます。

そういうところで、学校に言ってもこれは違うな、行政の地域包括支援センターふらっとに相談しても違うな、本当に不登校を経験したお母さん方が組織をされるような、そういう一つの団体があると、ちょっと心の拠り所、聞いてもらえるところがあるといいなというお話も聞きましたので、その一番のところが、やはりハルジオンにその役目を担っていただきたい。開催場所についても、それから子供が増えれば増えるほどサポートする人が増えてくるものですから、やはり金銭的な補助も大変必要になってくるのではないかと考えておりますので、教育委員会事務局は生涯学習も学校教育も所管していますし、市民福祉部のほうも関わっていますけれど、一度そのお話を聞いていただきながら、どうしていくのがいいかってことはまた聞いていただけますでしょうか。

◎議長（澤史朗）

答弁を求めます。

□教育長（下出尚弘）

そういった親と子供を受け止めて支えていく、そういう思いのある方々等が御相談にいらっしゃった折には、真摯に誠意を持ってお話を聞いて、また、市としてもできることを一緒に考えていきたいなということを思っておりますので、よろしく願いいたします。

○10番（住田清美）

市としては年々増えていく不登校気味の子たち、不登校の子たちに手厚い支援はいただいておりますが、それにまた親御さん、子供の声に真摯に耳を傾けていただいて本当にありがたく思っておりますが、もう一歩進んだところで、また違うポジションでのところも考えていただけるとありがたいと思います。

少子化に関しては、ちょっと視点は違うんですけども、今、飛騨神岡高校が少子化に伴う、それから私立の授業料の無償化に伴う子供たちの確保について苦慮されているというところもありますので、今後多分学校運営についてもいろいろなところで少子化の影響が出てくると思いますので、またしっかりと精査していただきながら、子供たちのために動いていただけるとありがたいと思っています。

それでは次の質問に移らせていただきます。今ほどは少子化のお話をさせていただきましたが、2つ目は、人口減少の中でも、その率が伸びているシニア世代の実情の質問をさせていただきたいと思います。

日本の社会は、団塊の世代が全て75歳を迎え、国民の5人に1人が後期高齢者となる超高齢社会となり、医療・介護・年金制度をどのように支えていくかという2025年問題を迎えています。加えて、昨今の人手不足により、定年延長で働くシニアも増えています。人生、今や100年時代、飛騨市では100歳以上の方は20人以上いらっしゃる、高齢化率も40%。今後、この数値は高くなっていくことでしょう。

シニア層の大きな組織として、飛騨シニアクラブ連合会があります。古川町は朝霧連合会と称しますが、あとの3町は老人クラブ連合会という名称で、今年度は3,544名の会員を有しております。老人クラブは、地域を基盤とする高齢者の自主組織です。昭和38年8月に施行された老人福祉法第13条第2項において、「地方公共団体は、老人の福祉を増進することを目的とする事業の振興を図るとともに、老人クラブその他当該事業を行う者に対して、適当な援助をするように努

めなければならない。」と位置づけられています。市からはシニアクラブに対して補助金も出ています。飛騨シニアクラブは、高齢者が住み慣れた地域で安心して暮らせるよう支え合うをメインテーマに、「のぼそう！健康寿命、担おう！地域づくりを」のスローガンの下に、支え合い活動を推進しています。また、人口減少で労働人口が減っていく中、これまで以上に高齢者の労働力が求められ、元気なうちは何歳になっても働き続けるという皆さんで組織されている飛騨市シルバー人材センター。会員数は305名で、80歳以上の方も21%の高齢比率です。このように高齢化時代を迎える中、市としては地域づくりにおいてシルバー世代にどのような思いを抱いているのか、次の2点をお伺いします。

1点目は、地域におけるシニア世代の役割とは。当市でも高齢化が進み、今に2人に1人が65歳以上となる超高齢社会の構造になります。人口減少、過疎化、高齢化が進む中で、地域を守れるのはシニア時代ではないでしょうか。地域づくりの中で、シニア世代にどのようなことを期待されていますでしょうか、お伺いしたいと思います。

2点目は、飛騨市シニアクラブの現状についてです。飛騨市シニアクラブは、新規会員の減少と会員の高齢化、役員の成り手不足などによるクラブ解散が課題となっています。今年度は会員が500名余り減少し、特に神岡地区では4団体、350名の会員が脱会され、現在400名ほどの会員となっています。シニアクラブは自主組織ではありますが、生活を豊かにする楽しい活動、地域を明るくする社会活動、仲間づくり活動など、なくてはならない組織だと思います。もちろんシニアクラブとしても課題の洗い出しや新規会員開拓など手は尽くされていますが、市としてはこの現状をどう捉え、そしてこれをどう伴走して下さるのかお伺いしたいと思います。

◎議長（澤史朗）

答弁を求めます。

〔市民福祉部長 大上雅人 登壇〕

□市民福祉部長（大上雅人）

シニア世代の地域づくりについて2点御質問いただきましたので、お答えいたします。

1点目、地域におけるシニア世代の役割についてですが、地域づくりにおいて、シニア世代は支えられる側であると同時に、支える側としても社会の重要な一員として大きな役割を果たしていただいていると認識しております。シニア世代は、地域コミュニティの支え手として、地域の見守り活動やボランティア活動、自治会などに積極的に参加し、地域の安全確保や活性化に貢献することが期待されています。また、長年の仕事や生活で培った知識や技術、さらには文化や伝統を若い世代へ伝える役割も担い、地域社会や家庭、職場における世代間交流のかけ橋となっています。さらに、定年後も再就職や起業、あるいはパートタイムの仕事を通じて経済活動に参加し、社会の活力維持にも寄与しているのが現状です。

加えて、シニア世代の社会的役割は多様化しており、趣味や学び、社会貢献活動を通じて自己実現を図りながら豊かな人生を送り、社会への参加を継続されることが望まれ、シニア世代は地域づくりにおいて欠かせない存在となっています。

2点目、飛騨市シニアクラブの現状についてです。議員御指摘のとおり、そもそも各地域の人口減少により、市内の単位クラブにおいては何年も同じ方が役員を務めておられ、その方々も高齢となり、業務が負担となっていることが要因で、次の役員の成り手がいないことを理由に解散

している単位クラブがほとんどであり、特に神岡町内でその傾向が顕著となっています。

市のシニアクラブ補助金のメニューには、健康づくりや介護予防支援事業、若手高齢者組織化・活動支援事業などに対し、別枠で年間50万円の事業活動費支給などが備えられており、近年はeスポーツなど多世代交流に力を入れておられます。しかし、高齢者の中でも、団塊の世代の方より若い世代の方は就労されている方も多く、生活のニーズは多様化しており、地域の社会活動や仲間づくりといったことに積極的でない方も一定数おられることも事実です。

市といたしましては、引き続きシニアクラブの事務局と伴走しながら、地域に密着した魅力的な活動となるよう支援を継続いたしますが、このような脱退の流れは、ある意味避けることが難しく、高齢化自体には根本的な解決策がない現状を受け止め、いかに持続可能で活力ある社会づくりを進めていくかが重要だと考えています。例えば、社会福祉協議会が運営する地域のサロンやボランティア活動、地域包括支援センターが支援する体操教室やシルバーリハビリ体操指導士による通いの場、また、地域複合サロンによる生活支援、孤立や社会へのつながりが途切れることのないよう、地域見守り相談員の訪問活動にも力を入れ、今年度は郵便局との連携により、こうした見守り活動を強化したところです。

シニアクラブは、こうした地域コミュニティーの支え手、中核であることは変わりありませんが、その周りにある地域活動を実践している方や団体の支援、補完することにより、高齢化という課題を受け止めながら、多様なニーズに応える持続可能で活力のある地域社会の実現を目指していきます。

〔市民福祉部長 大上雅人 着席〕

○10番（住田清美）

シニア世代に期待してくださること、たくさん述べていただきました。今までシニアというと支えられる側というところから、今度は支える側としても大きな役割を持っているということもおっしゃっていただきました。そして長年の知識や技術がおりますから、それをしっかり後世に残す役割もあります。

今人間の生き方が多様化して、昔の団体という感覚の中から、今、個の世界に何となく皆さんの意識が変わっていく中で、シニアクラブの皆さんは自分の今の団体を守ろうということで一生懸命頑張っておられます。

成り手不足の問題、これが一番大きいということでしたが、成り手不足もありますけれど、なかなか新しい会員が入ってこない。それには今言いましたように個で楽しむことがある、個でやることもあるものですから、なかなか新規開拓にならないということが言われております。合併してすぐの頃でしたけど、昔で言う婦人会ですが、もともと女性会というものもありました。こちら成り手不足、会員の減少で解散してしまいました。こういう団体って、1回解散すると次にできるような雰囲気もなければ、各行政区のほうで女性部として位置づけているところもあるんですけど、大きな団体として集うことはもうできなくなりました。このシニアクラブの皆さんも、今一生懸命頑張っています。それで、老人福祉法のことを言いましたけれども、こういうものに対して地方公共団体は適正な援助をするようにって、この援助って私はお金だけではないと思っています。いろいろなことについて一緒に伴走はしてくださるというお言葉は頂きましたけれども、何とかこの団体を残せるような形で、市の中でももう少しお知恵を出していただき

ながら、何かもうちょっとこの団体がしっかりと残っていけるようなことにはできないでしょうか。

◎議長（澤史朗）

答弁を求めます。

△市長（都竹淳也）

シニアクラブ、とっても大事な団体だと思っております。もちろん法律の条文もさることながら、この高齢化が進む飛騨市の中で重要な役割を果たしてゐることは間違いないことですし、生涯現役っていうことを支えていく上でも非常に大事じゃないかと思っております。

ただ一方で、先ほど来ずっと話があるように、組織の在り方っていうのがやっぱり非常に課題になってるし、これはシニアクラブだけじゃなくていろいろな団体が今岐路に来ているっていうのは間違いないと思うんですね。こうしたときに、市がアドバイスということではないんですが、一緒に考えていくというような話をするところがある中で、よく私が申し上げるのは、今あるシニアクラブなり、今ある団体をどうしていこうかではなくて、今そういう団体が世の中に全くなくて、何か新たにをつくろうと思ったときにあなたはどのような組織をつくりますかっていうふうに考えたほうがいいのではないかという話をするところがあるんです。

今シルバー人材センターがありますけども、高齢の方が長く働くようになって、やっぱり70～75歳まで働いていらっしゃる方が多くて、シルバー人材センター自体も高齢化の問題っていうのを抱えているんですが、それでも仕事をするという切り口っていうのは、これはまた違う切り口なものですから、やっぱりそういった中で活動がある。仕事をする中でも、それぞれの得意な分野がありますよね。そういったところでグループができ上がってくると、意外とそれがヒントになるのではないかな。高齢者のグループっていうのが幾つか存在してます。趣味のグループもあれば、そういったつながりのあるグループっていうのも存在してる。むしろ、そのグループの存在自体をシニアクラブに位置づけることはできないのか。つまり、考え方を全く変えて、今あるものをどうするかじゃなくて、シニアクラブ2.0みたいな、そういう発想っていうのを私はできてると思っていまして、これはこれに限らず地域の団体もそうだと思うんですね。行政区もある種そうかもしれないし、そのほかいろいろなサークル活動のクラブなんかも同じようなことがあるんですけど、やっぱり時代に合わせて、今どういうふうだったら参加したいのかっていうところから考えていくということが大事なかなと思っていて、これはシニアクラブに限らず、いろいろな団体からいろいろなお声を聞くものですから、そういったことを一緒に悩みながら考えるっていうことが一つ市としてできることじゃないかなと思いますし、また、そういった観点の中で一緒に考えていきたいということをおもっております。

○10番（住田清美）

そういう切り口もあるということを、今お話を伺って、シニアクラブに限らずいろいろな団体が今多岐路に来ているということも確かにあります。我々議員も成り手不足で議会改革等調査特別委員会ができていくぐらいですから、いろいろ直面をしていると思います。でも、先ほど部長がおっしゃいましたように、シニアの世代に期待すること、これからの地域づくりはシニアの皆さんにお願いしたいということは間違いないお話だと思っています。私ももうシニアの一員です。ですから、皆さんとまた力を合わせて知恵を出し合いながら、そしてまた行政のほうにも力

を借りながら、今後地域の担い手としてシルバーが元気で、そして地域づくりの中核となれるように努力してまいりたいと思っております。

以上をもちまして、私の質問を終わらせていただきます。

〔10番 住田清美 着席〕